馬太傳福音書

明治訳

第一章

1 ［一アブラハムの 裔(こ) なるダビデの裔イエス・キリストの系圖］

［アブラハム］○アブラハムは、キリストより二千年以前、洪水後 凡(およそ) 三百年、カルデヤのウルに生まれ…百才の時、其妻サラ九十才の時、イサクを生めり。百七十才にて死し、マクペラの洞に葬られたり。

［アブラハムの裔なる］○裔にして

3 ［三ユダ、タマルに 由(より) てパレスとザラとを生パレス、エスロンを生エスロン、アラムを生］

［パレス］○ペレズ

［ザラ］○ゼラ

5 ［五サルモン、ラハブに由てボアズを生ボアズ、ルツに由てオベデを生オベデ、エツサイを生］

［ルツ］○ルツはモアブ人なり。

［ラハブ］○ラハブはエリコ城市の娼婦なり。

6 ［六エツサイ、ダビデ王を生ダビデ王ウリヤの妻に由てソロモンを生み］

［ウリヤの妻］○バテシバ

7～16 ［七ソロモン、レハベアムを生レハベアム、アビヤを生アビヤ、アサを生 八アサ、ヨサパテを生ヨサパテ、ヨラムを生ヨラム、ウッズヤを生 九ウッズヤ、ヨタムを生ヨタム、アカズを生アカズ、ヘゼキヤを生 一〇ヘゼキヤ、マナセを生マナセ、アモンを生みアモン、ヨシヤを生り 一一バビロンに徙（うつ）さるる時ヨシヤ、エホヤキンと其兄弟を生 一二バビロンに徙されたる後エホヤキン、シアテルを生シアテル、ゼルバベルを生 一三ゼルバベル、アビウデを生アビウデ、エリヤキンを生エリヤキン、アゾルを生 一四アゾル、ザドクを生ザドク、アキムを生アキム、エリウデを生 一五エリウデ、エリアザルを生エリアザル、マツタンを生マツタン、ヤコブを生 一六ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生り此マリヤよりキリストと稱（となふ）るイエス生れ給ひき］

○ソロモンよりエホヤキンに至るまで十四代は悉くユダヤ人の王であった。

アビヤ、アサ、ヨサパテ、ウッズヤ、ヨタムであった。其他は悉く悪しき王であった。積悪の結果国亡び、民は徙され、七十年間バビロン河の畔に懺悔され、涙を流した。エホヤキン囚われてバビロンに連れゆかれ、其王の臣下となりてより、十四代の孫にあたるヨセフは、ナザレより何の良きもの出でんやと云われし、ガリラヤのナザレの貧しき大工であった。ダビデの家（アブラハム）の家が衰落の極に達したる時に、イエスが生まれた。

リンコルン曰く「神は特別に平民を愛し給ふ」と。

7～11 ［七ソロモン、レハベアムを生レハベアム、アビヤを生アビヤ、アサを生 八アサ、ヨサパテを生ヨサパテ、ヨラムを生ヨラム、ウッズヤを生 九ウッズヤ、ヨタムを生ヨタム、アカズを生アカズ、ヘゼキヤを生 一〇ヘゼキヤ、マナセを生マナセ、アモンを生みアモン、ヨシヤを生り 一一バビロンに徙（うつ）さるる時ヨシヤ、エホヤキンと其兄弟を生］

〇善王七人　ソロモン、アサ、ヨサパテ、ウッズヤ、ヨタム、ヘゼキヤ、ヨシア

〇悪王七人　レハベアム、アビア、ヨラム、アカズ、マナセ、アモン、エホヤキン

第二章

○偽の王と眞の王。ヘロデはエドム人であった。エドム人と云ふは、イサクの子エサウの子孫である。博士の原語 MAGI は 彼斯（ペルシヤ）の占星学者の称である。

3 ［三ヘロデ王これを聞て痛む又エルサレムの民もみな然り］

○ヘロデ王之を聞きて痛むは、驚倒する意なり。何故エルサレムの民は其音信を聞きて喜ばず、却って驚き震へしかと云ふに、エルサレムに神の子を迎ふる準備がなかったのである。今日主が再臨し給はば如何。喜ぶ者多きか、戦慄すも者多きか。ヘロデはローマ人の後援を得て僅かに王となったのである。而して時の祭司、学者、長老は此偽王に 詔（つゝ）ひて、眞の王の徳することなく、異邦人は却って遠路わざわざ尋ね来りて、礼物を捧ぐ。イエスは生まれたる初めより其國人に歓迎せられざりき。

5 ［五答けるはユダヤのベテレヘムなり蓋預言者の□されたる言に］

［預言者］○米迦（ミカ）は前凡八百年、イザヤと同時代の預言者なり。

15 ［一五ヘロデの死るまで其所に止れり是主預言者に託て我わが子をエジプトより召出せりと云給ひしに應せん爲也］

［預言者］○何西亜（ホセア）も亦イザヤ、ミカと殆ど同時代の預言者なり。

17 ［一七即ち預言者エレミヤの言に］

［エレミヤ］○エレミヤは紀元前六百年頃の人。

18 ［一八歎き悲み甚く憂る聲ラマに聞ゆラケル其兒子を歎き其兒子の無によりて慰を得ずと云しに應へり］

［ラマ］○ラマはエルサレムの北方二里に在り。

［ラケル］○ラケルはヤコブの妻にして紀元前約二千年の人。

［其児子］○ラケルの子供とは、その子孫の意にして、ユダヤ人を云ふ。

［無によりて］○エレミヤの時代にバビロン人攻め入りて、之をとりこにして本国に送れり。無きによりてとは、ユダヤ国が空白地になりしなり。此預言は直接にイエスに関せるに非ず、バビロン王は捕虜をラマに集めてバビロンに送れり。ラケルの墓は、ベツレヘムの近くに在り。

23 ［二三ナザレと云る邑に至りて居り彼はナザレ人と稱れんと預言者に託て云れたる言に應せん爲なり］

［ナザレ］○ナザレはガリラヤの南にして、エルサレムの東北三十里に在り。

第三章

4 ［四此ヨハネは身に駱駝の毛衣をき腰に皮の帯をつかね蝗蟲（いなご）と野蜜を食物とせり］

［駱駝の毛衣］○毛を以て織りたる

7～12 ［七バプテスマを受んとてパリサイ及サドカイの人々の多く來れるを見て彼等に曰けるは蝮の裔（すえ）よ誰なんぢらに來んとする怒を避べきことを告しや 八然（かな）ば悔改に符ふ果を結べよ 九爾曹（なんぢら）われらが先祖にアブラハム有と云ことを意ふ勿れ我爾曹に告ん神は能（よく）この石をもアブラハムの子と爲しめ給ふなり 一〇今や斧を樹の根に置る故に凡て善果を結ざる樹は斫（きら）れて火に投入らるべし 一一我は爾曹を悔改させんとて水を以て爾曹にバプテスマを授く我より後に來者は我に勝て能力あり我は其履（くつ）を提（とる）にも足ず彼は聖靈と火をもて爾曹にバプテスマを授ん 一二手には箕を持て其禾場（うちば）を淨め麥（むぎ）は斂（あつめ）て其倉にいれ糠（から）は熄（きえ）ざる火にて燬（やく）べし］

○ヨハネがパリサイ人とサドカイ人を罵りしは、両者共に欠点ありしが、自らそれを悟らせ、謙遜の態度を以て来らざりし故なり。パリサイの徒よ、我がバプテスマを形式なりと思ふ勿れ。サドカイの徒よ、我がバプテスマを此世的、政治的のものと思ふ勿れ。バプテスマは眞に悔改めなり。眞に悔改めたらば、其実を示せ。

○パリサイ派は、保守主義をとりて、国粋保存を主張し、サドカイ派は進歩主義をとりて、外国思想（主としてギリシャ文明）の誘入を主唱したるが、パリサイ派は精神を忘れて形式に流れ、サドカイ派は、此世に重きを置き、政治を主とし、貴族的華美、驕奢に流れ、人間の甦り、霊魂の不滅を否定せり。

［蝮の裔よ］○蝮の裔よとは、偽善者よ也。

11 ［一一我は爾曹を悔改させんとて水を以て爾曹にバプテスマを授く我より後に來者は我に勝て能力あり我は其履（くつ）を提（とる）にも足ず彼は聖靈と火をもて爾曹にバプテスマを授ん］

○ヨハネの天職は如何。イエスを天下に紹介するにありき。

13～17 ［一三斯時イエス、ヨハネにバプテスマを受んとてガリラヤよりヨルダンに來り給ふ 一四ヨハネ辭（いなみ）て曰けるは我は爾よりバプテスマを受べき者なるに爾反て我に來る乎 一五イエス答けるは暫く許せ如此凡ての義き事は我儕盡す可なり是に於てヨハネ彼に許せり 一六イエス、バプテスマを受て水より上れるとき天忽ち之が爲にひらけ神の靈の鴿（はと）の如く降て其上に來るを見る 一七又天より聲ありて此は我心に適（かなう）わが愛子（あいし）なりと云り］

○ヨハネは、イエスの来たりたるに驚けり。そは、イエスは罪無く、全く聖きものなればなり。罪無くして、悔改めのバプテスマを受けんとす。ヨハネ驚けること宜なり。イエスは何故にバプテスマを受けしか。イエスは罪人の友なるべく任ぜり。彼の最後は、罪無くして十字架にかかり、彼の始めは罪無くして罪人の中に交わりたり。彼は絶対に謙遜なりき。神が愛子と云ひ、精霊鳩の如く下れること理なりと云うべし。我等も傲然高ぶることなく、罪人の友、弱者の友とならば、神は必ず、我等を祝し給ふべし。

第四章

12 ［二イエス、ヨハネの囚れし事を聞てガリラヤに往］

○ヨハネはヘロデヤの事につきて、ヘロデ・アンテパスの事をいさめ、獄に投ぜられ、後殺されたり。ヨハネを捕へたるは、イエスの生まれたる時、之を殺さんとせるヘロデ大王の第二子なり。後年ヘロデヤのすすめにより、王の称を得んとし、ローマに至りたるに、却て罪を得て、リオンに追放せられたり。

13 ［三ナザレを去ゼブルンとナフタリの界なる海邊のカペナウンに至て此に居り］

○ヤコブの子ゼブルンの子孫は、ガリラヤの北に住み、ナフタリの子孫はガリラヤの南に住めり。

［カペナウン］○湖の西北

17 ［一七斯時よりイエス始て道を宣傳へ天國は近けり悔改めよと曰たまへり］

○時に年三十

18～19 ［一八イエス、ガリラヤの海邊を歩て、ペテロと云シモンその兄弟アンデレと二人にて海に網うてるを見たり彼等は漁者なり 一九之に曰けるは我に從へ我［爾曹一なんぢら］を人を漁る者と爲ん］

○イエスの選びたる弟子は、学者にもあらず、富者にもあらず、中流階級の労働者なりき。此中流の人が國家の中堅なり。

24 ［二四其 聲名（きこえ） あまねくスリヤに 播（ひろが）りしかば人々すべての患へる者 萬殊（さまざま） の病また痛悩めるもの鬼に憑たるもの癲癇（てんかんちうぶう） 癱瘓 の病に罹れる者を彼に 携來（つれき） ければ之を醫せり］

［スリヤ］○地中海の東にして、パレスチナの東北にあたる。

25 ［二五ガリラヤとデカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダンの外より、多の人々きたり従ふ］

［デカポリス］○デカは十、ポリスは邑（まち）、ガリラヤ湖の東南を云ふ。

第五章

○山上の垂訓は、主の祈祷を布衍したものである。

17 ［一七われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿われ來て之を廢るに非ず成就せん爲なり］

［律法と預言者］○律法と預言者とは、旧約全書全体である。

［成就］○成就とは、旧約の書物を精神的に成就することである。

19 ［一九是故に人もし誡の 至微(いとちいさ)き一を 壞(やぶ)り又その如く人に教なば天國に於て至微き者と 謂(いは)れん凡そ之を行ひ且人に教る者は天國に於て大なる者と謂るべし］

○教への小なるものに注意を怠るべからず。聖書に叶はせん為なりと所所にあるは、旧約を成就する意である。

41 ［四一人なんぢに一里の公役を強なば之と偕に二里ゆけ］

○当時ローマの兵士は誰人をも捉へて、一リーグ、凡一里限り己れの荷を負はしむる権を有した。故に人々兵士をいとひ、其かげを望めば、即ち逃げかくれた。

第六章

21 ［二一蓋なんぢらの財の在ところに心も亦ある可れば也］

○宝に束縛されてはならぬ。されるされぬは、宝の多少にはない。心の持ち方にある。

22 ［二二身の光は目なり若なんぢの目瞭かならば全身も亦明なるべし］

○身の燈は目也。眞理を悟り、神を信ず。霊の眼なり。目の悪い人は、体中暗く覚えられる。

23 ［二三若なんぢの目眊らば全身暗かるべし是故に爾の中の光もし暗からば其暗こと如何に大ならず乎］

○全身暗かるべしとは、暗黒を以て充つべしである。霊の眼の暗きは、肉の目の暗きより遙かに不幸也。光の神を内に宿さざる為なり。外の目の明かなるが如く、内の目も明らかでなくてはならぬ。

24 ［二四人は二人の主に事ること能ず蓋これを惡かれを愛み此を親み彼を疎べければ也なんぢら神と財に兼事ること能はず］

○神に対して誠実、人に対して親切、其單純にして、専心神に向かわざるべからず。

○ロトの妻、名利も権勢も後まわしにして「財は財神」。只、神の御旨に従わねばならぬ。

○与えたまふものに満足し、人をうらやむな！

25 ［二五是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飲また身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ生命は糧より優り身體は衣よりも優れる者ならず乎］

○「欲深き人の心と降る雪は、積もるにつれて道を忘る」。

金銭も神よりの預り物と思ひ、善きことの為に用いねばならぬ。

人は食ふ為に生きるのではなく、生きる為に食ふのである。しかも、其生きるのは、神に奉仕する為であることを知らねばならぬ。此根本本義を知りて、人間の本分を行ふ者を、神が飢しめ給ふ道理が無い。神に信頼して其本分を尽せ。煩悶（生活）するな。

33

［三三爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のものは皆なんぢらに加（くわ）らるべし］

○たとへ巨万の富をつかむとも、神のわからぬ者は、眞の安心、眞の喜びなく、霊的の盲者である。而して霊の眼は如何にして開くか。イエスに接するにある。

イエスは光である。其光に接して始めて、自分の眼が開くのである。

他の動物にかかることのあるべき筈がないからと人生観は一変する。不平は去る。平和が来る。

一たび霊眼を開かれ、再び曇らざるよう注意すべきである。

34

［三四是故に明日の事を憂慮（おもいわづらふ）なかれ明日は明日の事を思わづらへ一日の苦勞は一日にて足り］

○富の奴隷となることなく、悪に誘はるることなく、神に奉仕するには相当の苦労がいる。従って克己努力も必要である。取越苦労をして、今日のことを怠ってはならぬ。イエスキリストを信ずるによりて、其義を全ての信者に給ふてへだてなし。

○実際人を最も煩するものは、取越苦労である。物質的のものもあれば、精神的のものもある。

第七章

1～5 ［一人を議（ぎ）すること勿れ恐ぐは爾曹もまた議せられん 二爾曹が人を議する如く己も議せらるべし爾曹が人を量るごとく己も量らるべし 三なんぢ兄弟の目にある物屑（ちり）を視て己が目にある梁木（うつばり）を知ざるは何ぞや 四己の目に梁木のあるに如何で兄弟にむかひて爾が目にある物屑を我に取せよと曰ことを得んや 五僞善者よ先おのれの目より梁木をとれ然ば兄弟の目より物屑を取得るやう明かに見べし］

○人を責むること軽く、己れを責むること重く、己れの欠点は塵も梁木の大に見、人の過去は梁木の大なるも、埃の小に見るべきである。

○悪に敵する勿れ。

○嘲むる者をいましむるは、耻（はじ）を己れに得、悪しき人を責むる者は、疵を己れに得ん。

嘲る者を責ること勿れ。恐くは、彼れ汝を惡（にく）まん。知恵ある者をせめよ。彼れ汝を愛せん（箴七 8）。

愚なる者の耳に語ること勿れ。彼れ汝が言の示す悟りをいやしめん（箴二三 9）。

3 ［三なんぢ兄弟の目にある物屑（ちり）を視て己が目にある梁木を知ざるは何ぞや］

○前章二二の意。己れの目悪しくして、何ぞ人に目を明かにせよと云ふか。

○身の光は目也。

7～14 ［七求めよ然ば與られ尋よ然ばあひ門を叩よ然ば開かるることを得ん 八蓋すべて求る者はえ尋る者はあひ門を叩く者は開かる可ればなり 九爾曹のうち誰か其子パンを求んに石を予んや 一〇また魚を求んに蛇を予んや

一一然ば爾曹惡き者ながら善賜（よきたまもの）を其子に予ふるを知まして天に在す爾曹の父は求る者に善物（よきもの）を予ざらん乎　一二是故に凡て人に爲られんと欲ことは爾曹また人にも其ごとく爲よ是　律法（おきて）と預言者なる也　一三窄（せま）き門より入よ沈淪（ほろび）に至る路は濶その門は大なり此より入もの多し　一四生に至る路は窄その門は小し其路を得もの少なり］

○恵みと祈りは、井のつるべの上下の如く。祈り上れば恵みは下り来る。汝、先ず神の國と其正しきとを求めよ。さらば（以下、欠）

12

［一二是故に凡て人に爲（せ）られんと欲（おもふ）ことは爾曹また人にも其ごとく爲よ是　律法（おきて）と預言者なる也］

○この故に人は神の助けを祈らざるべからざる故に、人に善を行はざるべからず。神はかく愛也。故に汝の父の完全が如く、汝らも完全すべし。

第八章

23～26 [二三イエス舟に登ければ弟子等も之に從ふ 二四此とき大なる 颶風(はやて) おこりて舟を 蔽(おほふ) ばかりなる浪たちしにイエスは 寢(いね) たり 二五弟子等これに近きて 醒(おこ) し曰けるは主よ救たまへ我儕亡んとす 二六イエス彼等に曰けるは信仰うすき者よ何ぞ懼るや遂に起て風と海とを 斥(いましめ) ければ大に 平息(おだやか) になりぬ]

○イエスと共に居れば何の恐れも無き筈である。浮世の波風荒く、迫害あり、誘惑あり。我等亡びんとする時、祈祷を以て主を呼ぶべきである。ガリラヤの海は地中海の水面より低く、北方に高山ありて、岳おろし急に起こることあり。琵琶湖にもこの事あり。彼等信仰無きに非ず。されど風涛に恐れたり。故に信仰うすき者よと云ふ。イエスは自然をも征服する力を有し給へり。

28 [二八イエス向の岸なるガダラ人の地に至れるとき鬼に憑れたる二人のもの墓より出て彼を迎ふ 猛(たけき) こと甚しくして其途を人の過ること能はざりしほど也]

[ガダラ] ○ガリラヤ湖の東南に在る邑なり。

[墓] ○洞穴

31 [三一鬼イエスに求て曰けるは若われらを逐出さんとならば 豕(ぶた) の 羣(むれ) に入ことを容せ]

○悪鬼は地獄に帰るよりも、豕(ぶた) の群に入ることを望めるなるべし。

第九章

1 ［イエス舟に登わたりて故邑（ふるさと）に至ければ］

［故邑］○己が町カペナウム

3 ［三ある學者たち心の中に謂けるは此人は褻涜（けがすこと）を言り］

○人の罪を許すは、神のみなるに、何ぞかかることを云ふか。

5 ［五爾の罪赦されたりと言と起て歩めと言と孰（いづれ）か易き］

○罪を赦すと云ふは易きも、其事実を示すは難し。我今其事実を示さん。基督の教への広まると同時に、敵を生じた。

12～13 ［一二イエス聞て彼等に曰けるは康強（すこやか）なる者は醫者の助を需ず唯病ある者これを需（もとむ）　一三われ矜恤（あわれみ）を欲て祭祀を欲（このま）ずといふ此は如何なる意（こころ）か往て學ぶべし夫わが來るは義人（ただしきひと）を招ために非ず罪ある人を招きて悔改させんが爲なり］

○何（ホセ）六6、我慈しみを喜びて、犠牲を喜ばず。神を知るを喜ぶこと燔祭に優されり。

母前一五22、エホバは其言に従ふことをよみし給ふごとく、燔祭と犠牲をよみし給ふや。

米（ミカ）六6、エホバの汝に求め給ふことは、只正義を行ひ、憐みを愛し、謙遜（へりくだ）りて、汝の神と共に歩むことならずや。

18 ［一八イエス彼等に此事を言る時ある宰（つかさ）きたり拜して曰けるは我女（むすめ）いま既に死り來て彼に手を按（つけ）たまはば生べ

し］

［宰（つかさ）］○會堂の宰である。

22 ［三二イエスふりかへり婦を見て曰けるは女よ心安かれ爾の信仰なんぢを愈（いや）せり即ち婦この時より愈］

○我は復活なり、生命なり。我を信ずる者は、死ぬるとも生きん。

凡そ生きて、我を信ずる者は、永遠に死なざるべし（約一一（ヨハ）25～26）。

33 ［三三鬼おひ出されて暗唖（おふし）ものいへり衆人（ひとびと）あやしみ曰けるはイスラエルの中にも未だ斯る事は見ざりき］

○倒されし雪は自ずと起き上り、倒せし雪は消えてあと無し。

37 ［三七其とき弟子等に曰給けるは收稼（かりいれもの）は多く工人（はたらくひと）は少し］

○神の為に働く人の如何に少なき哉。基督団の始めは、極めて微々たるものであった。漁夫、税吏であった。

第一〇章

2 [二その十二使徒の名は左の如とし首にはペテロと名け給ひしシモンその兄弟アンデレ、ゼベタイの子ヤコブその兄弟ヨハネ]

[十二使徒]

〇使徒として使はされし者と云ふ意味である。彼等は、金持でも、学者でも、身分ある者でもなかった。天地を動かす力尋ぬれば、かよわき人の誠にぞある。馬可（マルコ）、路加（ルカ）によれば、イエスは弟子を選び給ひし前夜、終夜祈り給へる記事あり。十一人は皆ガリラヤ人、ユダ一人はユダヤ人なりき。

[ペテロ]〇ペテロはギリシャ語にて、岩の意。ヘブル語にてはケパ

[ヨハネ]〇ヨハネは雷の子と云はれたり。ヨハネの母サロメは、イエスの母マリアと姉妹なり。

3 [三ピリポ、バルトロマイ、トマス 税吏（みつぎとり） マタイ、アルバイの子なるヤコブ、タッダイと名くるレッバイ]

[バルトロマイ]〇バルトロマイは、ナタナエルと同人なりとの説あり。

4 [四カナンのシモン、イスカリオテのユダ是すなはちイエスを賣（わた）しし者なり]

[カナン]〇カナンは地名にあらず。熱心の意。当時ユダヤに熱心に独立を唱へし一党派であり、之をカナンと云へり。

[イスカリオテ]〇イスカリオテは、ユダヤの一邑、カリオテ人と云ふ意。

9 [九爾曹金または銀または錢を貯へ帶（おぶ）る勿れ]

○宗教は貧乏（プアー）な時に純粋（ピュアー）である。

14 ［一四もし爾曹を接(うけ)ず爾曹の言を聽ざる者あらば其家または其邑を去とき足の塵を拂へ］

○ポ(パ)ウロとバルナベが、ユダヤ人の反抗に追はれて、アンテオケを出づる時、彼等は足の塵を掃ってイコニオムに向った（徒一三51、一八6）。

16 ［一六われ爾曹を遣すは羊を狼の中に入るが如し故に蛇の如く智く鴿の如く馴良(おとなし)かれ］

○嘘も方便であってはならぬ。正直は最良の方便でなくてはならぬ。

17 ［一七愼みて人に戒心せよ蓋人なんぢらを集議所に解し又その會堂にて鞭(むち)つべければ也］

○迫害来る。

第一一章

11 ［一一誠に爾曹に告ん婦の生たる者の中いまだバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき然ど天國の最小き者も彼よりは大なる也］

［ヨハネ］○モーセよりヨハネまで一千五百年。

16～17 ［一六我この世を何に譬んや 童子(わらべ) 街に坐し其 侶(とも) を呼て 一七われら笛ふけども爾曹をどらず 哀(かなしみ) をすれども爾曹胸うたずと云に似たり］

○ユダヤ人のかたくなを責めたり。

20 ［二〇厥時(そのとき) イエス多の 異能(ことなるわざ) を行たまひたる 諸邑(むらむら) の悔改めざるに由て 責(いましめ) いひけるは］

［諸邑］○ガリラヤ湖の西北の諸邑なり。

21 ［二一ああ禍(あああさわい)なる哉コラジンよ 噫 禍 なる哉ベテサイダよ爾曹の中に行し異能を若ツロとシドンに行しならば彼等は早く麻をき灰を蒙りて悔改しなるべし］

［コラジン］○コラジンは、カペナウムの東北にあり。

［ベテサイダ］

○ベテサイダは、ガリラヤ湖の北方ヨルダン河の口にあり。

○十四章の大奇跡は、此北方にて行われたり。

［ツロとシドン］○ツロ、シドンは、ピニケの港にして（徒一五3）ガリラヤの西北レバノン山と地中海の中央

にある小国なり。貿易盛なりしが、風俗乱れ、エゼキエル（二六7～8）の予言せる如く滅亡せり。

23 ［二三既に天にまで擧られしカペナウンよ又陰府（よみ）に落さるべし蓋なんぢに行し異能を若ソドムに行しならば今日までも尚保存しならん］

［カペナウン］○カペナウムは、キリストの生涯中特に長く住はれたる所なり。

27～30 ［二七父は我に萬物を予たまへり父の外に子を識もの無また子および子の顯す所の者の外に父を識者（しるもの）なし二八凡て勞（つかれ）たる者また重を負る者は我に來れ我爾曹を息（やす）ません二九我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負て我に學なんぢら心に平安を獲（う）べし三〇蓋わが軛は易わが荷は輕ければ也］

○アウグスチン（アウグスチヌス）曰く「人は神が造り給ひしものなれば、神に從はざる間は平和を得ることなし」と。又曰く「キリストを愛する心あらば、一切の荷物は軽かるべし」と。

キリストは、吾等と共に荷を負ひ給ふ。不信者は、キリストの助けあるを知らざるなり。

第一二章

30 ［三〇我と偕ならざる者は我に背き我と偕に 斂(あつめ) ざる者は散すなり］

［我と偕ならざる者］〇我と共ならざる者は、サタンにつく者也。

36 ［三六われ爾曹に告ん凡て人のいふ所の 虚言(むなしきことば) は 審判(さばき) の日に之を訴へざるを得じ］

〇言を慎めよ。殊に良心に背ける言を出すこと勿れ。これ精霊を汚すものなり。

39 ［三九答て彼等に曰けるは 奸悪(かんあく) なる世は 休徴(しるし) を求されど預言者ヨナの休徴の外は之に休徴を與られじ］

〇イエスの奇跡は、人を驚かす為ではなかった。皆大なる愛の発露であった。而してイエスの奇跡中の奇跡は其復活である。

［ヨナ］〇ヨナは紀元前八二五年の頃。

41 ［四一ニネベの人審判の日に共に起て今の世の罪を定めん彼等はヨナの 誨(をしへ) に由て悔改たり夫ヨナより大なる者ここに在］

［ニネベ］〇ニネベはアッスリアの都。

50 ［五〇蓋すべて我が天に在す父の旨を行ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なれば也］

〇天文を父とし、愛を家憲とし、一大ホームを建設すべきである。

「四方の海　皆 同胞(はらから) と　思ふ世に　など波風の　立ち騒ぐらむ」　明治天皇

第一三章

○七つの喩

一、種播き
二、からす麦
三、からし種
四、パン種
五、隠れたる宝
六、良き眞珠
七、引き網

3 ［三イエス譬を以て多端（さまざま）の言を人々に語ぬ種まく者播（まき）に出しが］

○種播く者はイエスである。傳道者は其手傳（てつだい）である。イエスの播き給ふ種にても、悉く生えるものではない。之を受くる人が悪いのである。

8 ［八また沃壤（よきち）に遺（おち）し種あり實を結べること或は百倍あるひは六十倍あるひは三十倍せり］

○（補筆）御魂の結ぶところの実は、仁、愛、喜楽、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、温柔、撙節（そんせつ）（加五22）。

25 ［二五人々の寢たる間に其敵きたり麥の中に稗子（からすむぎ）を播て去り］

○第二、生えるもの悉く麦ではない。以て非なるからす麦がある。偽りの信者がある。（不信者、堕落信者の他に）

○第三、教會のうちに、悪魔は来たりて巣食ふに至る。福音に世に嫌わるる者である。悪魔の分子其うちに混入して、社會的勢力となり、政治家、実業家等の利用するところとなる。イギリス聖公會の政府と結託し、神の名によりて民の自由を奪ひ、迷信を伝へ、無幸を苦しめ、聖徒を殺したローマ法王亦然り。教会の清きは、貧にして、無勢力なる間だけである。

29 ［敵］○敵とは悪魔である。

［二九］否おそらくは爾曹 稗子（からすむぎ）を 拔（ぬき）あつめんとて 麥（むぎ）をも共に 拔（ぬく）べし］

○信者が此世の人に（例へば政治家の如き）引きづられていくのである。

33 ［三三］また譬を彼等に語けるは天國は 麪種（ぱんだね）の如し婦これをとり 三斗（さんと）の粉の中に 藏（かく）せば悉く 脹發（ふくれいだ）すなり］

○第四、パン種は内部の俗化を云ふ（路（ルカ）一二1）。からし種は教会外部の拡張を云ふ（可（マコ）八15）。

［麪種］○パン種は此世の精神である。

44 ［四四］また天國は畑に 藏（かくれ）たる寶の如し人みいださば之を 祕（かく）し喜び歸り其 所有（もらもの）を盡く賣てその畑を買なり］

○第五、腐れたる教会の内に、宝の函即ち聖書の発見があるのである。聖書は教會の内に在りしも、教會は之を忘れて地中に埋めたのである。今より凡四百年前、ルーテルは古きラテンの聖書を発見した。彼之を胸に当てて云った。「之れ聖書なり。」コロンブスの発見も之に及ばぬ。聖書は記されたる福音書の眞理。

45 ［四五］また天國は 好（よき）眞珠を求んとする 商人（あきびと）の如し］

○第六、宝の発見に次て宝玉の発見がある。当時ダイアモンドはまだ発見されなかった。黙示録に金剛石とあるは、碧玉の誤訳である。宝石の女王は眞珠であった。シーザーが其友ブルタスの母に送った一個の眞珠は、今日の金に換算すれば四十八万円にあたり、佛國の有名な旅行家ダバニューがペルシャ王に送りしものは、其價百八十万円に相当すると云ふ。之を発見せる商人の喜び知るべきである。而して此宝玉は何であるか。聖書の中心眞理である。所有を賣（う）るとは、此世の宝はこれに比して何の價も無きものとなるなり。

○「真理中の真理」

47 ［四七］また天國は海に投（うち）て各様（さまざま）の魚をとる網の如し」

○天網疎不漏（てんもうかいかいそにしてもらさず）

52 ［五二］イエス彼等に曰けるは然ば天國について教られたる學者は新き物と舊き物とを其庫より出す家の主の如し」

○第七、最后の審判である。新しき誠も古き誠も、古くより地上に現れたる書も、地中に隠れたる宝も、皆之を獲得することを得べし。

第一四章

1 [一其ころ 分封(わけもち)の君ヘロデ、イエスの 聲名(うわさ)を聞て]

○ヘロデ・アンパスは大ヘロデの子。ヨハネを殺したることを良心に咎められて、イエスの噂を聞きてヨハネが甦へりたりと思った。

3 [三前にヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に由てヨハネを捕へ縛て 獄(ひとや)に入たり]

○ヨハネは一年半も牢に入れられて居た。

6 [六ヘロデ誕生の日を祝へる時ヘロデヤの 女(むすめ)その座上にて舞をなしヘロデを悦ばせければ]

[ヘロデヤの女] ○サロメ

7 [七何なる物にても求に任て予んとヘロデ之に誓たり]

○言葉は慎まねばならぬ。「駟(し)も舌に及ばず」。ヘロデは後に先妻の父ペトリア王アレタスの為めに攻められて敗軍し、ヘロデヤと共にフランスのリオンに追放せられて、悲惨なる最期を遂げた。サロメは氷の上を歩いて水に陥ち、其、氷に首を切られて死んだ。

15 [一五日くるる時其弟子きたりて曰けるは此は 寂寞(さびしき)ところにして時もはや 過(おそ)し諸邑に往て自ら食を求させん爲に人々を去しめよ]

○踰越に近き春の日、所はガリラヤ湖の北東隅ベテサイダの辺の野であった。

19 [一九遂に 衆人(ひとびと)に命じて草の上に 坐(すわら)しめ五のパンと二の魚をとり天を仰て謝しパンを 擘(わり)て弟子にあたふ弟子之

を衆人に予ぬ］

○金銭を濫費し、時間を濫費し、精力を濫費し、其生涯を濫費し、善を行ふ機会を濫費する者が世には多いことである。物を粗末にしてはならぬ。

21 ［二一食し者は婦（をんな）と幼童（こども）の外凡そ五千人なりき］

○約（ヨハ）六15によれば、人々此奇跡に驚き、イエスを推して王となさんとせり。

30 ［三〇風の烈（はげ）きを見て懼れ沈かかりければ主よ我を救たまへと曰］

○ガリラヤの海は長約五里、巾の廣き所は約二里。

ペテロは一寸目をイエスより離し、風や浪の方に気を取られたから沈みかけた。故に常にイエスを仰ぎ、外物に心を奪われてはならぬ。スポルジョン（チャールズ・ハッドン・スポルジョン 1834-1892 イギリスのバプテスト派の牧師）は「我を仰ぎ望め、さらば救われん」。

33 ［三三舟に居（をり）し者ちかよりて彼を拜し曰けるは誠に爾は神の子なり］

○賽（イザ）四五22の一句によりて信仰に入った。

34 ［三四遂に渡てゲネサレの地に到しかば］

［ゲネサレ］○ゲネサレは湖の西北にある豊なる邑なり。故にゲネサレの湖とも云ふ。

第一七章

1 ［一六日の後イエス、ペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネを伴ひ人を避て 高山（たかきやま） に登り給しが］

［高山］○ガリラヤの南タボル山ならんとの説あり。されどカイザリヤピリピの傍なるヘルモン山ならんか。

2 ［二彼等の前にて其 容貌（すがた） かはり其 面（かほ） 日の如く輝き其衣は白く光れり］

○イエスの変貌は、イエスの復活の 前表（さきぶれ） である、我等も、何時かはイエスの如く栄光化せしめられる。人は死ぬと定りたるものにあらず。死は罪の結果である。故にイエスは死せずして栄光化すべきものであった。而して 路（ルカ） 九 31 によれば、モーゼ、エリヤと語り給へることは、エルサレムに於て十字架を通して昇天すべきことであった。而して最後の審判に於ては、変貌山上の如く、死せる物も死せざる物も相語ることを得るのである。

10 ［一〇其弟子とふて曰けるは然ばエリヤは先に來るべしと學者の云るは何ぞや］

○弟子達は、種々の出来事によりて、イエスが待望せるキリストなるを悟った。然るにキリストの前にエリヤの来りて萬事を改むとの予言あり。然るにエリヤの来らざるは何故かと云ふなり。

14 ［一四彼等おほくの人の居ところに來しに或人イエスの所にきたり跪き］

［おほくの人の居ところ］○九人の弟子其他の人々の待ち居たる麓也。

16 ［一六之を爾の弟子に 携往（つきゆき） たれど醫すことを得ざりき］

［弟子］○九人の弟子

20 ［二〇イエス彼等に曰けるは爾曹信なきが故なり我まことに爾曹に告んもし芥種の如き信あらば此山に此處より
彼處に移れと命とも必ず移らん又なんぢらに能ざること無るべし］
○行の修らざる、徳の足らざる、学業の進まざる、事業の擧らざる、愛の深からざる、凡て信仰の足らざる故
なり。
24 ［二四彼等カペナウンに來れるとき納金（をさめきん）を集る者どもペテロに來て曰けるは爾曹の師は納金を出さざる乎］
［納金］○納金は神殿の修繕、祭祀等に要する費用にして、一人につき三十銭位なりき。
25 ［二五然（しから）ずと曰てペテロ家に入しときイエスまづ彼に曰けるはシモン爾は如何おもふや世界の王たちは税および
貢を誰より徵（とる）か己の子よりか他の者よりか］
［家］○家は多分ペテロの家なるべし。或はイエスが弟子達と共に借り居たる家ならんか。
［然ず］○納む
［まづ］○いち早く
［および］○亦は
26 ［二六ペテロ彼に曰けるは他の人より徵なりイエス彼に曰けるは然ば子は與（かかは）ることなし］
［與ることなし］○自由なり
27 ［二七然どかれらを礙（つまづ）かせざる爲に爾海に往て釣を垂よ初につる魚を取てその口を啓かば金一を得べし其を取て
我と爾の爲に彼等に納よ］
○キリストを神の独子なりと知らざる物は不思議に思ふべし。

〇銀貨。原文スタテール。六十銭にあたる。スタテールは、多分一小金塊なるべし。

第一八章

3 [三曰けるは我まことに爾曹に告んもし改まりて嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ]
[改まりて] ○翻りて。翻りては心を入れ替へて
4 [四然ば凡そこの嬰兒の若く自ら謙る者はこれ天國に於て大なる者なり]
○人新に生れずば神の國を見ること能はず（約三3）。眞正の偉人は、自ら偉人達を知らぬものである。誰にても此幼児の如く、己を低くする物は、人の目に最も小さしと見ゆる物が、却て神の前に偉大なることあり。
5 [五又わが名の爲に此の如き一人の嬰兒を接る者は我を接るなり]
[接る] ○接るは助け導くなり。
7 [七此世は禍なる哉そは礙かする事をすればなり礙く事は必ず來らん然ど礙を來らす者は禍なる哉]
○躓物あるによりて禍害なるかな。躓物は必ず来らん。純良の青年男女も必ず此世の誘惑に逢ふべし。而して世には此誘惑多し。
9 [九若し爾の眼おのれを礙かさば拔出して之を棄よ兩眼ありて地獄の火に投入れられんよりは一眼にて生に入は善なり]
[おのれ] ○汝
[地獄の火] ○火のゲヘナ
15 [一五もし兄弟なんぢに罪を犯ばその獨ある時に往て諫よもし爾の言を聽ばその兄弟を獲べし]

［獲べし］○足るなり

18 ［一八我まことに爾曹に告ん凡そ爾曹が地に於いて繫ことは天に於もつなぎ爾曹が地に於て釋（とく）ことは天に於も釋べし］

［釋］○許す

19 ［一九我また爾曹に告んもし爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ何事にても求ば天に在す吾父は彼等の爲に之を成たまふべし］

［心を合せ］○心を一つにし

20 ［二〇蓋わが名の爲に二三人の集れる處には我も其中に在ばなり］

○共同の祈り。ペンテコステのリバイバルには百二十人の人が、十日間心を一つにして、只管（ひたすら）祈りを務めた結果である。

22 ［二二イエス彼に曰けるは爾に七次（たび）とは言じ七次を七十倍せよ］

○太（マタ）五38

○目にて目を償ひ、歯にて歯を償へと云へることあるは云々。汝の隣を慈しみて、其敵を怨むべしとあるは云々。

○福音は、特に罪の許しの福音である。神が人の罪を赦し、人が相互の為の罪を赦す福音である。先天的に復讐を讃称せる我等日本人に、福音の了解せらるるは、誠に難きことである。人は神に対して罪を犯して、其御心を傷つけたのである。人我に罪を犯して、我等の心を傷つけたのである。傷の癒すには、外部と内部の

働きがある。外に在りては、キリストの十字架を仰ぎ、内に在りては、祈りと聖霊を受くることである。強健なる物の傷は早く癒さる如く、霊力に充つる物は、容易に人の罪を許すことが出来る。怨恨、鬱憤は貧弱の証である。敵を赦す最も善き方法は、敵の為に祈ることである。（太（マタ）五44）

24 ［二四調（ととの）べ始しとき千萬金の負債（ひきおひ）したる者を王に曳來りしに］

［千萬金］○一万タラントは二千五百万円にあたる。（羅（ロマ）三23～24）。

28 ［二八其臣（けらい）いでて己より銀一百の負債したる友に遇ければ之を執（とら）へ喉をとり負債を返せと曰］

○バビロンのベルシャザル王、4人の臣下と酒宴を催して居た時「数へたり、秤りたり、分たれたり」の文字が不思議の手にて壁上に現はれ、フランス王ルイ十二世は己に逆ひたる物の姓名の上に十字架を付けた、（山室氏（山室軍平 1872-1940 岡山県生、牧師、日本での救世軍創設）

［銀一百］○百デナリ、四十円にあたる。

第二一章

1 ［一かれら橄欖山のベテパゲに至りエルサレムに近ける時イエス二人の弟子を遣さんとして］

［橄欖］○橄欖はオリブ

［橄欖山］○オリブ山の東麓にベタニアの邑あり。エルサレムを距る二十四町。

［ペテパゲ］○ペテパゲは無花果の家と云ふ意。無花果多し。

12 ［二二イエス神の殿に入て其中なる凡の賣買する者を逐出し兌銀者の案鴿をうる者の椅子を倒し］

［神の殿］○外庭に在る

15 ［二五祭司の長と學者たち其行たまへる奇事を見また兒童輩の殿にて呼はりダビデの裔ホザナよと云を聞て怒を含］

［ホザナ］○ホザナはヘブル語にて救ひ給への意

24 ［二四イエス答て彼等に曰けるは我も一言なんぢらに問ん我にその事を告なば我も何の權威をもて之を行といふことを爾曹に曰べし］

○ジョージ・フォックス（1624-1691 イングランドの非国教徒、クエーカー創始者）曰く「牛津（オックスフォード）や剣橋（ケンブリッジ）の卒業証書が宗教家を作るものではない」と。

28～30 ［二八爾曹いかに意ふや或人二人の子ありしが長子に來りて曰けるは子よ今日わが葡萄園に往て働け二九答て否と曰しがのち悔て往たり三〇また次子にも前の如く曰けるに答て君よ我往べしと曰しが遂に往ざりき］

○改訳には兄と弟反對とあり居る。

33 [三三]また一の譬を聞ある家の主人葡萄園を 樹(つく)り 籬(まがき)を 環(めぐ)らし其中に 酒榨(さかぶね)をほり 塔(ものみ)をたて農夫に貸て他の國へ往　しが]

[塔] ○塔やぐら

[農夫] ○農夫共

[國] ○遠き國

39 [三九]即ち之を 執(とら)へ葡萄園より逐出して殺せり]

○我等は救主を冷遇してはならぬ。

41 [四一]彼等イエスに曰けるは此等の 惡人(あしきもの)を甚く討滅し期に及てその果を納る他の農夫に葡萄園を貸予ふべし]

[期] ○実りの期

42 [四二]イエス彼等に曰けるは聖書に 工匠(いへつくり)の棄たる石は家の隅の首石となれり是主の 行(なし)給ることにして我儕の目に奇とするところなりと録されしを未だ讀ざる乎]

○ソロモン、神の宮を建てた時大石があった。

44 [四四]この石の上に 墜(おつ)るものは 壞(やぶれ)　この石上に墜れば其もの碎かるべし]

[墜る] ○倒る

45 [四五]祭司の長等およびパリサイの人かれの譬を聞おのれらを指て言るを識]

○ロングフェロー（ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー1807-1882アメリカの詩人）曰く「神の臼は回り方が遅いが、其の中のものを細かに砕く。」

第二二章

4 ［四又ほかの僕を遣さんとして曰けるは我が筵（ふるまひ）すでに備れり我が牛また肥畜（こえたるもの）をも宰（ほふ）りて盡く備りたれば婚筵に來れと請（まねき）たる者に言（いへ）］

○父なる神を愛して納けんとし、子なるイエスは罪を赦さんとし、聖霊は潔めて新にせんとし、天の使は罪人の帰り来るを祝はんとす。聖書は教へ、天国は用意せらる。

11 ［一一王客を見んとて來りけるに茲に一人の禮服を着ざる者あるを見て］

○礼服は其式場の入口に用意せらる。古き人を脱ぎて、新しき人を着るべきである。（羅（ロマ）一三14）

主其子の婚筵（こんえん）に招きたし客たるべきユダヤ人はキリストを拒み、彼を十字架に付けた。キリストの父たる神は、神の愛たると同時に義の神である。王子の婚筵に列する者が、礼服を着くるは当然である。敬意を表すべきである。天国に汚れたる者は入れないのである。此礼服はキリストである。（羅（ロマ）一三14、加（ガラ）三27、弗（エペ）四22、西（コロ）三9）

16 ［一六その弟子とヘロデの黨（ともがら）を遣して云せけるは師よ爾は眞なる者なり眞をもて神の道を教また誰にも偏らざることを我儕は知そは貌（かたち）に由て人を取ざれば也］

［誰にも偏らざる］○誰をも憚り給ふことなし。

［貌（かたち）に由て取ざれば也］○人の外貌を見給はぬ故なり。

18 ［一八イエスその惡を知て曰けるは僞善者よ何ぞ我を試むるや］

○ジョンソン（サミュエル・ジョンソン 1709-1784 イギリスの文学者）の言葉に「愛国心は卑怯者の隠家である」と。昔から偽善者の癖として、他人を不忠者、売国奴と名けて、之を陥れんとするものである。人民としては其主権者に義務を尽くし、人としては、神に其本分を果せ。古来忠臣は孝子の門に出づと。君に忠なる者は、親に孝なるものである。神に忠なる者は、君にも、國にも忠なるものである。神を敬ひ、君を愛し、正義を行ふ者は、実に國の宝である。

21 ［二答てカイザル也といふ是に於てイエス彼等に曰けるは然ばカイザルの物はカイザルに歸しまた神の物は神に歸すべし］

［歸すべし］○納めよ

30 ［三○それ甦るときは娶らず嫁ず天にある神の使等の如し］

○今現に彼等の神である。彼等は今神の前に生きて居る。我等は七人なりとの歌がある。二人は外国に、二人は船乗、二人は天国に、それに自分。

［甦る］○人甦へる

第二三章

1 [一厥時(そのとき) イエス人々と弟子とに告て曰けるは]

[人々] ○群衆

2 [二學者とパリサイの人はモーセの位に坐す]

○偽善を戒む。學者とパリサイ人は言行不一致であった。行と口と心と違はずば、人に見られて何か恐れん（手島堵庵（てじまとあん 1718-1786 江戸中期の石門心学者））云ふことと身の行と違はずば、味噌も薪も其うちに在り。精神の抜けた所に形式が 喧(かまびす) しい。

[位に坐す] ○位を占む

3 [三故に凡て彼等が爾曹に言ところを守て行ふべし然ど彼等が行ふ所を爲こと勿れ蓋かれらは言のみにして行はざれば也]

[為] ○傚ふ

5 [五彼等の行は凡て人に見れんが爲にする也その 佩經(ふだ) を 幅闊(はばひろく) し其衣の裾を大にし]

[佩經] ○佩經は革にて 小筥(こばこ) を造り、中に 出埃及記(しゅつえじぷと)、申命記等の一部を記したるものを入れ、祈りの時左の 肱(ひじ) に掛け、又は額に附けたり。今では大なる名刺。

[裾] ○ふさ

8 [八爾曹はラビの稱を受ること勿れ蓋なんぢらの師は一人すなはちキリストなり爾曹はみな兄弟なり]

○神を信ずる者には人種問題無し。トルストイと乞食の話。

［爾曹（なんじら）は］○されど爾曹は

9 ［九また地にある者を父と稱（となえ）ること勿れ爾曹の父は一人すなはち天に在る者なり］

○天主教にては、今も牧師を神父と云ふ。當時も然りしならん。

12 ［一二凡そ自己を高する者は卑（ひくく）せられ自己を卑する者は高せられん］

［高せられん］○高せらる

13 ［一三噫（ああ）なんぢら禍（わざはひ）なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら天國を人の前に閉て自ら入（いら）ず且いらん　とする者の入（いる）を也許さざれば也］

○偽善者は、ジョン・バンヤン（ジョン・バンヤン 1628-1688 イギリスの牧師）の、所謂屋外の聖徒、室内の悪魔。メインテノン夫人（1638-1715 ルイ14世の秘密の王妃）が偽善に勝る罪悪無しと。偽善者は、自分ばかりでなく、他人をも滅ぼすものである。或宗教家が、酒は程加減に飲めばよいと教へて、其為めに身を過った多くの青年があった。噫禍なる哉を七度重ねている。

14 ［一四噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら　嫠婦（やもめ）の家を　呑（のみ）いつはりて長き祈をなす之　に由て爾曹最も重き審判を受べければ也］

○改訳、十四節省く。

15 ［一五ああ禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら徧く　水陸（うみやま）を　歴巡（へめぐ）り一人をも己が宗旨に引入んと　す既に引入れば之を爾曹よりも倍したる地獄の子と爲り］

［地獄］○ゲヘナ

16 ［一六］噫なんぢら禍なるかな 瞽者（めしい） なる相よ爾曹はいふ人もし 殿（みや） を指て誓はば事なし殿の金を指て誓はば 背（そむく） べからずと］

［背べからず］○果さざるべからず

22 ［二二］また天を指て誓ふ者は神の 寶座（みくらざ） および其上に坐する者を指て誓ふなり］

［坐する］○座し給ふ

23 ［二三］噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら 薄荷（はっか）、茴香（ういきゃう）、馬芹（まきん） の十分の一を取納て律法の最も重き義と仁と信とを爾曹は 廢（すつ） これ行ふ可もの也かれも亦廢べからざる者なり］

○煙管さへ心のやにを掃除せず、がんくびばかり磨く世の人。古歌。公平と憐みと忠信とを等閑にす。

［茴香］○イノンド

［馬芹］○クミン

24 ［二四］瞽者なる 相者（てびき） よ爾曹は 蠛（ぼうふり） を漉出して駱駝をも呑もの也］

［蠛］○ブヨ

25 ［二五］ああ禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹 杯（さかづき） と 盤（さら） の外を潔して内には貪欲と淫欲とを充せり］

○偽善者となる勿れ。

［淫欲］○放縦

27 ［二七］噫なんぢら禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹は白く塗たる墓に似たり外は美しく見れども内は

骸骨と 諸(さまざま) の 汚穢(けがれ) にて充]

[白く塗たる墓] ○毎年三月上旬、白堊を以て塗るを常とす。

29 [二九 噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹預言者の墓をたて義人の碑を飾れり]

[飾れり] ○飾りて

30 [三〇 又いふ我儕もし先祖の時にあらば預言者の血を流すことに與(くみ)せざりしをと]

○口は誠に立派。汝ら自ら指して先祖と云ふ、悪人の子孫たるを自認するに非ずや。

[あらば] ○ありしならば

31 [三一 然(さら)ば爾曹は預言者を殺し者の裔なることを自ら證す]

[然ば] ○かく

32 [三二 なんぢら先祖の 量(ますめ) を充せ]

○先祖の為足らざりし悪逆を成しとぐべし。

33 [三三 蛇蝮(へびまむし) の類よ爾曹いかで地獄の刑罪を免れんや]

[蛇蝮の] ○蛇よ蝮の

[地獄] ○ゲヘナ

35 [三五 そは義なるアベルの血より殿と祭の壇の間にて爾曹が殺しバラキアの子ザカリアの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て爾曹に報來らんが爲なり]

○患難迫害は、神の僕の運命である。伊太利の愛国者ガリバルジー（ジュゼッペ・ガリバルジー1807-1882イ

タリア統一運動推進）は、其国民に向ひて、我に従ひ来れと云った。汝に従ふ報酬は何か。曰く、患難、窮乏、病気、負傷及死。されど彼等は之に従ひ、其國の獨立を見た。ポウロも、我はキリストの為に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に会ふことを喜ぶ（哥後一二10）。されど義人を苦しむ者は禍なる哉。神の刑罰は必ず其上に降るべし。

［ザカリア］○ザカリアはユダヤ人の罪悪を責めたる為に、殿の内にて石にて打殺されたり（代下二四20）。紀元前八百四十年頃。

36 ［三六］われ誠に爾曹に告ん此事みな此代に報來るべし］

○此世（紀元七十年）エルサレムは羅馬兵に踏み荒され、多くの人は殺され、残れる者は所々に散されたり。

37 ［三七］噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣さるる者を石にて撃ものよ母雞（めんどり）の雛を翼の下に集る如く我なんぢの赤子（こども）を集んとせしこと幾次（いくたび）ぞや然ど爾曹は好（このま）ざりき］

○聖書中最も悲痛の暗黒の語であると。愛の憤慨である。

［遺さるる］○遺されたる

［雛］○其雛

39 ［三九］われ爾曹に告ん主の名に託（より）て來る者は福なりと爾曹の云んとき至るまでは今より我を見ざるべし］

［主の名に託（より）て来る者は福なり］○賛むべきかな主の名によりて来る者

第二四章

○石垣の石の如き大なるは幅四間に達し、大阪城の石も之に及ばなかった。荒廃に帰すべしとは誰も思ひもよらなかった。

イエスの之に対する大預言、大確信。一、三個の質問、時の問題と兆の問題。此預言は、主としてユダヤ人に對するものである。可一三、路二一が、つまりエルサレムの滅亡と世の終との混淆的預言である。

15 [一五是故に預言者ダニエルに託(より)て言れたる所の殘暴(あらす)にくむべきのものの聖處に立を見ば(讀者よく思ふべし)]

[ダニエル] ○ダニエルは前五百年頃の人なり。

[残暴にくむべきもの聖處に立] ○ローマ兵、エルサレムに近づかば

16 [一六厥時ユダヤにをる者は山に遁れよ]

[山] ○山とはヨルダン川の東。

20 [二〇爾曹冬または安息日に逃ることを免れん爲に祈れ]

○冬は雨多く、逃げるに困難なり。安息日は旅行を禁じ、市門を閉じている。

21 [二一其とき大なる患難(なやみ)あり此の如き患難は世の始より今に至るまで有ざりき又後にも有じ]

○エルサレム陥落の時、殺されたる者は百万人の多きに達せりと云ふ。ローマ兵は都より逃げ出づる者を捕らへて十字架に釘け、付近の森林を切り尽せりと云ふ。

22 [三三若その日を少くせられずば一人だに救るる者なからん然ど選れし者の爲に其日は少くせらるべし]

[その日] ○その日とは禍の日数なり。ローマ兵との戦の日なり。

34 [三四われ誠に爾曹に告ん此等の事ことごとく成まで此民は廢(うせ)ざるべし]

[此民] ○此民とは、今生きて居る民の意。即ち我等之を見るべしの意なりとの説あれど。

35 [三五天地は廢(うせ)ん然ど我言は廢じ]

○グラッドストン（ウィリアム・グラッドストーン 1809-1898 イギリスの政治家）曰く「茲に唯一の重大問題あり。そは人の知能と心の霊に神の言葉の眞理を如何に有力に扶植すべきかと云ふことである」と。

[癈ん] ○過ぎ行かん。

36 [三六その日その時を知ものは唯わが父のみ天の使者(つかひ)も誰もしる者なし]

○知らざる方却て幸なり。何時にてもよき様に、常に用意せざるべからず。ジョン・ウエスレー（1703-1791 イギリス国教会の司祭）の話。（馬太余師）二3）（出所不明）

39 [三九洪水の來り悉く之を滅すまで知ざりき此の如く人の子も亦きたらん]

○永井尚政が新に老中?になるに方り、先輩井伊直孝に忠告を求めると、油断大敵を二六時中忘れるなと云った。

45 [四五時に及て糧を彼等に予さする爲に主人がその僕等の上に立たる忠義にして智僕(さときしもべ)は誰なる乎]

○イエスの終末観に対する三喩(たとえ)がある。其一は、四十五節以下の僕の喩にて、糧を与ふる僕とは信者を導く教役者である。第二は、十人の童女の喩にして、信者の団体たる教會に対する審判である。第三は、信者各

自に対する審判にして、其与へられたる宝の総勘定をなさざるべからざる日が来るのである（太（マタ）二五14～30）。

第二五章

○天国の福音が地上に於て経過すべき歴史である。

1 ［一其とき天國は燈を執て新郎（はなむこ）を迎に出る十人の童女（むすめ）に比ふべし］

［燈］○燈は日本のカンテラの如きもの。燈は外形である。

3 ［三愚かなる者は其燈をとるに油を携へざりしが］

［油］○油は聖霊である（來（へブ）一　9）。

15 ［一五各人の智慧に從ひて或者には銀五千或者には二千或者には一千を予へおき直に旅行（たびだち）せり］

［銀］○銀とは信仰を指すものである。与へられたる信仰の量に從ひて、充分神の為に働くべきである（羅（ロマ）一二6、7、8）。

［銀五千］○五タラント。一タラントは二千円位。

［一六五千の銀を受し者は往て之を貿易（はたらか）し他に五千を得たり］

［往て］○直に往きて

18 ［一八然るに一千を受し者は往て地を掘その主の金を藏（かく）せり］

［主の金を藏せり］○地にかくせりとは、己の心に奥深く信仰を隠して、人に向かって告白しないのである。迫害や反対を恐れて、隠し置くことは、自ら滅亡の谷に陥ることである。

19 ［一九 歴久て後その僕等の主かへりて彼等と會計せしに］
［會計］○計算
20 ［二〇五千の銀を受し者その他に五千の銀を 携來りて主よ我に五千の銀を預しが他に五千の銀を儲たりと曰ければ］
［五千の銀を預し］○銀行に預くるとは、其信仰を告白することである。告白せずしては信仰は生きない。ルーテル曰く「汝信ずるか、さらば大胆に告白せよ。大胆に告白せんか、さらば汝は苦難に逢ふべし。汝苦難に逢はんか、さらば汝は主より慰められるべし。信仰告白、十字架は、必ず相次いで起こるべきものなり」少なくとも信仰の告白を以て信仰は増し加へらる。
［受し者］○受し者は
23 ［二三主かれに曰けるはああ善且忠なる僕ぞなんぢ 寡なる事に忠なり我なんぢに多ものを 督らせん爾の 主人の 歡樂に入よ］
［忠なり］○忠なりき
27 ［二七然らば我が金を 兌換館に 預置べきなり然ば我が歸たるとき本と利とを受べし］
［兌換舗］○銀行
31 ［三一人の子おのれの榮光をもて 諸の 聖使を 率來る時はその榮光の位に坐し］
○大審判
○今は貧富、貴賤、男女、人種、種々の差別があるが、審判の時は唯善人と悪人と別たれるだけである。祝さ

れたる者と 詛(のろ) はれたる者と区別せらるるのである。

34 ［三四斯て王その右にをる者に云ん吾父に 惠(めぐま) る者よ來りて 創世(よのはじめ) より 以來(このかた) なんぢらの爲に備られたる國を 嗣(つげ)］

［恵るる］○祝されたる

41 ［四一遂にまた左にをる者に曰ん罰せらるべき者よ我を離れて惡魔と其 使者(つかひ) の爲に備たる熄ざる火に入よ］

［罰せらるべき］○呪われたる

［備たる］○備へられたる

46 ［四六此等の者は 窮(かぎり) なき刑罰にいり 義者(ただしきもの) は 窮(かぎ) りなき 生命(いのち) に入るべし］

○人に親切を尽して、天に寶を積むべきである。火にも焼けず、盗人に奪われず、如何なる金庫の中に貯ふるよりも、安全である。

［此等の］○かくて此等の

第二六章

3 ［三此とき祭司の 長(をさ) および民の 長老等(としよりたち) カヤパと云る祭司の長の 邸(やしき) の庭に集り］
［祭司の長］○大祭司
［邸の庭］○邸の中の庭
4 ［四詭計(たばかり) をもてイエスを 執(とら)へ殺さんと共々に 謀(はらり) いひけるは］
［謀いひけるは］○謀りたれど、又云ふ。
5 ［五祭の日には 行(なす) べからず 恐(おそら)くは民の中に 亂(らん) おこらん］
［祭の日には］○祭の間は
6 ［六イエス、ベタニヤの 癩病人(らいびようにん) シモンの家に 居(ゐ) たまへる時］
［イエス、ベタニアの］○イエス、ベタニアにて
7 ［七ある 婦(をんな) 蝋石(うせき) の 器物(うつはもの) に價たかき 香膏(にほひあぶら) を 盛(もり) てイエスの食する所に携來り其 首(かうべ) に 斟(そそぎ) しかば］
○ある婦、石膏の壷に入りたる價高き香膏を持来り、食事の席につき給ふ。
○人は算盤勘定のみしているべきではない。此婦人はイエスを心より愛したもので、其行為は計らずも葬の役に立ったのである。
12 ［一二彼がこの 香膏(にほひあぶら) を 我體(わがみ) に 斟(そそぎ) しは我の 葬(はうむり) の爲に 行(なせ) る也］
［葬の為を］○葬の備へを

13 ［一三われ誠に爾曹に告ん天の下いづくにても此福音の宣傳らるる處には此婦の行し事もその紀念の爲に言傳らるべし］

［天の下いづくにても］○全世界

［紀念の為に］○紀念として

15 ［一五我なんぢらに彼を賣さば幾何を予るか遂に銀三十にて約したり］

○人は慾のために目が眩むものである。（提前六10）金を愛して義を忘れてはならぬ。油断してはならぬ。

17 ［一七除酵節の首の日］○木曜日の夜

［除酵節の首の日］○木曜日の夜

20 ［二〇日くるる時イエス十二弟子と偕に席に就］

○汝の大庭に住ふ一日は千日にも優れり。我は悪の幕屋に居らんよりは、寧ち我が神の家の門守とならんことを願ふ（詩八四10）。

［日くるる］○日くれて

23 ［二三答て曰けるは我と偕に手を盂に着る者は即ち我を賣す者なり］

○手を鉢に入るる者、我を賣らん。

26 ［二六かれら食する時イエス、パンを取て祝し之をさき弟子に予て曰けるは取て食これは我身なり］

○昔ステフェングレットは、三度の食事毎にイエスの裂き給ふた肉と、流し給ふた血を思い出したと云ふことである。

［身］○からだ

28 ［二八これ新約の我血にして罪を赦さんとて 衆(おおく) の人のために 流所(ながすところ) のもの也］

［罪を赦さんとて］○罪の赦しを得させんとて

37 ［三七ペテロ及ゼベタイの二人の子を携へ憂へ哀みを催し］

［ペテロ］○かくてペテロ（携へ）携へ行き

38 ［三八彼等に曰けるは我心いたく憂て死るばかり也ここに待て我と偕に目を醒しをれ］

○世界万人の罪を其両肩に担ひたる苦みであった。

［ここに待て］○我等ここに止りて待て

39 ［三九少し 進往(すすむゆき) てひれふし祈いひけるは吾父よ若かなはば此 杯(さかづき) を我より離ち給へ然ど我心の 從(まま) を 成(なさ) んとするに非ず 聖旨(みこころ) に任せ給へ］

［成んとするに］○成んとするには

40 ［四〇而て弟子に來り其 寢(いね) たるを見てペテロに曰けるは如此 一時(ひととき) も我と偕に目を 醒(さまし) をること能はざる乎］

○祈るべき時に眠っているは此三人には限らぬ。誘惑におち入らぬよう、目を覚まし、且つ祈るべきである。

人生の航路は多難である。

○ブレッセンスと云ふ人の言葉に「我が心のままにとはあらず、御心のままになし給へと祈る時、沙漠も楽園となり、御心のままにとは非ず、我が心のままになし給へと云ふ時、楽園も沙漠になる。

○フレッチャー夫人（ジョン・フレッチャー1886-1950 アメリカの詩人）は、私の宗教は Thy will be done（御

心をなし給へ）の四字に尽きると云った。

［弟子に］○弟子たちのもとに

［其寝たる］○眠れる

［如此］○汝等如此

41 ［四一 惑に入ぬやう目を醒かつ祈その靈には願ふなれど肉體よわきなり］

［惑に入ぬやう］○惑はし（誘惑）に陥らぬよう祈れ。その霊には願ふなれど、祈りに其心は熱すれど

42 ［四二 二次ゆきて復いのり曰けるは吾父よ若われに此杯を飲さで離つこと能ずば聖旨に任せ給へ］

［若われに此杯を飲さで離つこと能ずは］○此杯を若しわれのまでは過ぎ去りがたくば

［聖旨に任せ給へ］○聖旨のままになし給へ

45 ［四五 遂に其弟子に來りて曰けるは今は寝て休め時は近し人の子罪人の手に付されん］

［其弟子に來りて］○其弟子たちのもとに来たりて

［寝て］○眠りて

［時は］○見よ時は

［近し］○近づけり

［付されん］○付さるるなり

46 ［四六 起よ我儕往べし我を賣す者近きたり］

○シーザーは其殺されんとする時、頼みに思ふブルタスが刺客のうちに在るを見て「やよブルタス汝もか」と

叫びながら群がる白刃の下に倒れた。

48 ［賣す］○うる

［四八イエスを賣す者かれらに號をなして曰けるは我が接吻する者は夫なり之を執へよ］

［號をなして］○豫め合図を示して

49 ［四九直にイエスに來りラビ安かと曰て彼に接吻す］

［直に］○かく直に

［安かと］○安かれと

51 ［五一イエスと偕に在し者の一人手をのべ劔を拔て祭司の長の僕を擊その耳を削おとせり］

○マホメットは、劍を以て宗教を広めたが、イエスは、愛を以て其福音を広められた。彼は平和の君である。戰は其好まざる處である。

［祭司の長］○大祭司

55 ［五五此時イエス人々に曰けるは劔と棒とを持て盜賊を執ふる如して我を執にきたる乎われ日々爾曹と偕に殿に坐して誨しに爾曹われを執ざりし］

［執ざりし］○執ざりき

56 ［五六然ど此の如なるは皆預言者の録たる所に應成せん爲なり遂に弟子等みなイエスを離れて逃去ぬ］

［預言者の録たる處に應成せん為なり遂に弟子等みなイエスを離れて逃去ぬ］○預言者の書の成就せん為なり。

隧爰に弟子等皆イエスを捨てて逃去ぬ。

57 ［五七イエスを執たる者これを曳て學者と長老の集れる所の祭司の長カヤパに携（つれ）ゆく］
［祭司の長］○大祭司
58 ［五八ペテロ遠く離れてイエスに從ひ祭司の長の庭にまで至その結局（なりゆき）を見んとて内にいり僕と偕に坐せり］
［祭司の長］○大祭司
［僕と偕に］○下役共僕と偕に
59 ［五九祭司の長等および長老すべての議員ともにイエスを殺さんとして妄證（いつはりのあかし）を求れども得ず］
［祭司の長等］○祭司の長等
62 ［六二祭司の長たちてイエスに曰けるは爾こたふる言なき乎この人々の爾に立る證據（しょうこ）は如何］
［證據は如何］○證據に何も答へぬか
63 ［六三イエス默然（もくねん）たり祭司の長こたへて彼に曰けるは爾キリスト神の子なるか我なんぢを活神（いけるかみ）に誓はせて之を告しめん］
○改「我れ汝に命す。活ける神に誓ひて我らに告げよ。汝はキリスト神の子なるか」
［祭司の長こたへて］○大祭司の長たちて
64 ［六四イエス彼に曰けるは爾が言る如し且われ爾曹に告ん此のち人の子大權（ちから）の右に坐し天の雲に乘て來るを爾曹みるべし］
○主の再臨
［大權の］○全能者の

65 ［六五是に於て祭司の長その衣を裂（さき）て曰けるは此人は瀆（けがす）ことを言り何ぞ外に證據（しようこ）を求んや爾曹も今その瀆（けがし）た　ることを聞（きく）］

［祭司の長］○大祭司

［此人］○彼れ

［證據］○証人

［聞］○聞けり

67 ［六七是に於て彼等その面に唾し且拳にて擊（うて）りまた或人かれを批（たたき）いひけるは］

［擊り］○擊ち

［批］○てのひらにて批

69 ［六九ペテロ庭に坐ゐけるに或婢（しもめ）きたりて爾もガリラヤのイエスと偕（とも）なりと曰ければ］

［庭］○中庭

［偕なり］○偕に居た

70 ［七〇ペテロ凡の人の前に此言を肯（うけが）はずして我なんぢが言ところを知ずと曰り］

○ペテロは、皆汝について躓くとも、我は何時までも躓かじ（太（マタ）二六33）と大言し、目を覚し居れと云ふに眠り、卑怯にも遠く離れて従ひ、自分を隠して下役共に座し、一度虚言を云ひたる為め、二度も三度も謂はねばならぬに至った。初めが大切である。松の雪払へば元の緑哉。時雨時雨て元の月哉。悔改が必要である。過たば改むるに憚ること勿れ。

71 ［七一 出て(いで) 門口に至れる時また他の婢これを見て 其處(そこ) にをる者に曰けるは此人もナザレのイエスと偕に 在し(あり)］
［出て］○かくて出て
［門口に］○門口まで
［者］○者共
［此人］○此人も
［ナザレ］○ナザレ人
［在し］○居たり

72 ［七二ペテロまた 肯(うけが)はずして誓ふ我この人を知ずと］
［誓ふ］○誓ひて
［我この人］○我はその人

73 ［七三暫くありて 旁(かたは)らに立たる者すすみ近てペテロに曰けるは誠に爾もその 黨(ともがら) の一人なり 蓋(そは) なんぢの方言なんぢを顯せり］
［者］○者共
［誠に］○たしかに
［その］○かの

74 ［七四是に於てペテロ詈り且誓て我その人を知ずと曰しが 頓(やが)て 雞(にはとり) 鳴ぬ］
［頓て］○折しも

75 ［七五ペテロ、イエスの雞（にはとり）なかざる前なんぢ三次（たび）われを知ずといはんと云たまへる言（こと）を懷起（おもひいだ）し外に出（いで）て悲み哭（なけ）り］

［なかざる前］○なく前に

［悲み］○いたく悲しみ

第二七章

2 ［二既に彼を縛ひきゆきて方伯のポンテオ・ピラトに解せり］

［ポンテオ・ピラト］〇総督

3 ［三是に於てイエスを賣ししユダ彼の死に定られしを見て悔その銀三十を祭司の長長老等に返して］

［賣ししユダ］〇うりし

4 ［四曰けるは無辜の血を付し我は罪を犯しぬ彼等いひけるは我儕に於て何ぞ與らんや爾みづから當べし］

［付し］〇うりて

5 ［五ユダその銀を殿に投棄て其處を去ゆきて自ら縊たり］

［殿］〇聖處

6 ［六祭司の長等この銀を取て曰けるは此は血の價なれば賽錢の箱に入べからずとて］

［血の價］〇血の價とは、キリストの血の價と云ふ意なるべし。

［賽錢の箱に入］〇宮の庫に納む

9 ［九是に於て預言者エレミヤに託いはれたる言にイスラエルの民に估られ估られし者の價の銀三十を取］

［エレミヤ］〇エレミヤ、前六二八年より五八六年に至る四十二年間預言せり。

10 ［一〇主の我に命ぜし如く陶工の田を買ぬと有に應へり］

〇或人の言に、人はキリストか絶望か二つの内の一つに居ると。絶望の者となってはならぬ。

17 ［一七ピラト民の集りしとき彼等に曰けるはバラバか又はキリストと 稱(となな)ふるイエスなる乎なんぢら誰を 釋(ゆる)さん
と 欲(おも)ふや］
［ピラト］○ピラトには賢き妻があったが、其忠告に従ふことを得なかった。
19 ［一九方伯 審判(つかさばき) の座に坐りたる時その妻いひ遣しけるは此 義人(ただしきひと) に爾 干(かかは)ること勿れ蓋われ今日夢の中に彼につ
きて多く憂たり］
［方伯］○方伯なほ審判の座に坐りたる時
［いひ遣しける］○人をしていひ遣しける。
20 ［二〇祭司の長長老たちバラバを 釋(ゆる)しイエスを殺さんことを 求(ねがへ) と民に 唆(すす)む］
［民］○群衆
24 ［二四ピラトその言の益なくして唯亂の 起(おこら)んとするをしり水を取て人々の前に手をあらひ曰けるは此 義者(ただしきもの) の血
に我は罪なし爾曹みづから之に 當(あた)れ］
○外国人を支配するの困難を見るべし。政治家の慣用手段は妥協なり。ピラトは主義も節操も無き臆病な政治家であった。彼は人の前に手を洗ったが、神の前に心を洗はなかった。ソロモンの（箴二九25）に「人を畏るれば罠に堕る。エホバを頼む者は守られんと」とピラトは間もなくローマに招び帰され、ゴール（ガリア、フランス）と云ふ地方に流され煩悶して自殺した。
［しり］○見て
［義者］○義人

25 [二五民みな答て曰けるは其血は我儕と我儕の子孫に係るべし]

○エルサレム陥落の時は一円に三十人づつ奴隷として賣られたと云ふことである。罰が無いと思ってはならぬ。

[子孫に係るべし]○子孫とに帰すべし。

26 [二六是に於てバラバを彼等に釋しイエスを鞭ちて之を十字架に釘ん爲に付したり]

[バラバを]○ピラトはバラバを

27 [二七方伯の兵卒イエスを携へ公廳に至り全營を其もとに集め]

[方伯の]○是に於て方伯の

[兵卒]○兵卒共

[公應]○官邸

[全營]○全隊

30 [三〇また彼に唾し其葦を取て其首を撃り]

○信者は人に嘲弄されても、キリストの事を思ふて忍ぶべきである。

[撃]○たたく

32 [三二その出し時クレネ人のシモンといふ者に遇ければ強て之に其十字架を負せたり]

○十字架を負ふは無上の光榮である。其時は迷惑に思っただろうが。十字架を思ひて、イエスの恩恵を深く感謝せねばならぬ。

33 [三三彼等ゴルゴタ譯ば即ち髑髏と云る處に來り]

［彼等］○かくて彼等

［ゴルゴタ］○ヘブル語にゴルゴタ、ラテン語にカルバリ

35 ［三五］斯てイエスを十字架に釘しのち鬮を拈て其衣を分これ預言者の言に彼等互に我が衣を分わが裏衣を鬮にす　と云しに應へり］

［イエスを］○彼等イエスを

39 ［三九］往來の者イエスを詈り首を搖て曰けるは］

○中途にして十字架を捨ててはならぬ。汝死に至るまで忠実なれ。さらば我汝に生命の冠を与へん（默二10）。

十字架無くば冠無し。

［者］○者共

42 ［四二］人を救て己が身を救あたはず若イスラエルの王たらば今十字架より下るべし然ば我儕かれを信ぜん］

○イエスは鞭たれた。我等の癒されん為。イエスは嘲られた。我等の祝福されん為。罪無くして罰せられた。我等の赦されん為め。茨の冠を預かれた。我等に榮の冠を得させん為め。衣を剝れた。我等に義の衣を着せん為め。自ら救はなかった。我等の救はるる為め。

44 ［四四］同に十字架に釘られたる盜賊も同くイエスを詈れり］

［同に］○と同に

45 ［四五］晝の十二時より三時に至るまで其地あまねく黒暗となる］

○十字架に架けられた。三時過息を引取られた。

49 ［四九 餘人（ほかのもの） 曰けるは 俟（まて） エリヤ 來りて 彼を 救ふや 否 試（こころむ） べし］
［否試べし］○否や我等見ん。
54 ［五四 百夫（ひやくにん） の 長（かしら） と偕にイエスを守たるもの地震および其有し事を見て甚く懼れ此は誠に神の子なりと曰り］
［長と偕に］○長及び
55 ［五五 此處に遙に望ゐたる多の 婦（をんな） ありし彼等はガリラヤよりイエスに從ひ 事（つかへ） し者等なり］
○男子顔色無し。ルーテル曰く「世に敬虔なる婦人程尊きものなし」。
56 ［五六 其中（うちをり） に 居 し者はマグダラのマリアとヤコブ、ヨセの母なるマリアとゼベタイの 子等（こたち） の母となり］
［母となり］○母等も居た。
59 ［五九 ヨセフ 屍を取て清き 枲布（ぬの） に 裹（つつ） み］
［枲布］○亜麻の麻布
60 ［六〇 之を 磐（いはほり） に 鑿 たる己が新しき墓におき大なる石を墓の門に 轉（ころば） して去］
［門］○入口
62 ［六二 預備日（そなへび） の翌日祭司の 長（をさ） とパリサイの 人等（ひとたち） ピラトの所に 集來（つどひきた） り曰けるは］
［預備日］○あくる日即ち預備日、土曜
65 ［六五 ピラト彼等に曰けるは 守兵（まもるもの） は爾曹にあり 往（ゆき） て 意（おもひ） のままに 固守（かため） しめよ］
［守兵は爾曹にあり］○我等に番兵あり。
［意のままに］○力限り

第二八章

1 [一安息日終てのち七日の首の日黎明にマグダラのマリア及び他のマリアその墓を觀んとて來りしに]
[安息日終てのち七日の首の日]○日曜、紀元三十年四月九日
7 [七且ゆきて其弟子に告よ彼は死より甦り爾曹に先ちてガリラヤに往り彼處に於て爾曹かれを見べし我これを爾曹に告]
[且ゆきて]○且遠にゆきて
[見べし]○見るべしと
12 [二二彼等と長老あつまりて共に議おほくの銀子を兵卒に給て曰けるは]
[彼等と長老あつまりて]○祭司の長者等彼等と年寄り共と集まりて
14 [一四此事もし方伯に聞るとも我儕かれに勸て爾曹に憂慮なからしめん]
[方伯]○総督
[かれに勸て]○彼をなだめて
15 [一五かれら銀子を取て囑められたる如したりし是に於て此の如き話今日に至るまでユダヤ人の中に傳播られたり]
18 [如くたりし是に於て]○如したりしかば
[一八イエス進て彼等に語いひけるは天のうち地の上の凡の權を我に賜れり]

［天のうち地の上の］〇天にても地にても